

2016年度 修士論文

柔道形競技者の継続理由に関する研究

A study on active motivation for continuation of judo kata athletes

早稲田大学 大学院スポーツ科学研究科

スポーツ科学専攻 スポーツクラブマネジメントコース

5016A309-9

濱 名 智 男

Tomoo Hamana

研究指導教員： 間野 義之 教授

目 次

I 緒言	1
II 先行研究の検討	5
1. 柔道の意識に関する研究	5
2. 柔道競技者と他競技者との比較に関する研究	5
3. 外国人柔道競技者と日本人柔道競技者との比較に関する研究	6
4. 継続理由に関する研究	7
5. 先行研究のまとめ	7
III 研究目的	8
IV 研究方法	8
1. 調査方法	8
2. 調査対象	9
3. 調査期間	9
4. 分析方法	9
V 結果	10
1. 柔道形競技者の諸元	10
2. 柔道形競技者の継続理由に関する質問項目と集計結果	11
3. 柔道形競技者の因子構造	12
VI 考察	16
1. 4 因子の考察	16
2. 各因子の考察	16
(1)「精神性の向上」因子	16
(2)「社会性」因子	17
(3)「身体能力の向上」因子	19
(4) 競技志向 因子	20
(5) 先行研究との比較	21
3. 考察のまとめ	22
VII 結論	23
VIII 研究の限界	23
IX 実践への提言	23
引用参考文献	25
添付資料	27

I 緒言

嘉納治五郎は、明治 15 年(1882)2 月、我が国伝来の柔術を止揚して日本傳講道館柔道（以下、柔道とする）を創始した。大正 4 年(1915)、嘉納は柔道を「柔道は心身の力を最も有効に使用する道である。その修行は攻撃防御の練習によって心身を鍛錬修養し斯道の神髓を体得することである。そうしてそれによって己を完成し、世を補益するが柔道修行の究竟の目的である」⁸⁾と定義している。また、以上を端的に表現し、「心身の力を精力、善を目的としたその有効使用を善用として精力善用と、また、己の完成と世の補益を合わせて自他共栄とし、人間の道」（田中ら, 1993）²³⁾ともいわれている。

ところが近年の日本の柔道界には、この理念と矛盾するような、柔道修行者の不祥事があることは事実である。例えば、平成 23 年(2011) 12 月には、オリンピック柔道金メダリスト（2 連覇）が準強姦容疑で逮捕され、後に実刑判決を受けることとなった。平成 25 年(2013)3 月には、全日本柔道連盟による、日本スポーツ振興センターからの助成金不正受給問題が発覚、その後も指導者や柔道部員間による暴力問題が報道されている。

こういった状況において、そもそも嘉納が掲げた「精力善用」「自他共栄」の理念は、果たして現代に柔道を修行する者達が、競技を行う上での意識として根ざしているのであろうかとの疑問が生じる。これらの理念を柔道の指導場面において伝えることはあっても、競技を続けていく上で意識されているかどうかについては、必ずしも明らかにはなっていない。

嘉納は、柔道の攻撃防御の修行方法には形と乱取があるとした。「形とは攻撃防御に関し、あらかじめ種々の場合を定め理論に基づきて身体の操縦を規定し、その規定のごとく練習

する仕方」であるとし、「乱取とは一定の方式に拠らず、各自勝手的手段を用いて練習する仕方」¹³⁾であると述べている。また嘉納は両者の関係を「形と乱取との関係はこれを語学に譬うれば、形は文法に比すべく乱取は作文に比すべし。文法に精通するも作文を学ばざれば文章をよくしがたく、作文に熱心なるも文法を知らざれば文章に誤謬を生じやすし。ゆえに柔道の修行上形と乱取とは偏廃すべからざるなり」¹⁴⁾とし、双方を偏りなく行うことで柔道の本質を体得できると提唱している。

また、永木(2008)は、嘉納が指摘する形の効能を踏まえたうえで、「いつでもどこでも誰でも」が行いうるという、「大衆性」の観点による価値づけがなされ、さらには、「形にはそのような大衆性に関わって「生涯に亘る継続性」という観点が付与されている」¹⁸⁾と述べており、嘉納は、形による柔道の普及振興と生涯柔道の可能性について示唆していたといえる。

しかしながら、柔道は国内外での普及に伴い、競技としての柔道が盛んになると、柔道技法の原理を学ぶ、形による修行方法は閑却していった。そして形は、大多数の修行者にとっては昇段試験の際に学ぶだけのものとなり、柔道修行方法は実戦的な乱取に偏って行くこととなった。そして現在の柔道は、国際柔道連盟加盟国が約 200 ヶ国となり、オリンピックをはじめとする国際大会で各国の選手がメダルを争う競技スポーツとして発展を遂げている。またそれに伴い、柔道の技術も刻々と変化をしている。

このような状況の中、全日本柔道連盟は、現今の競技柔道偏重の趨勢を憂慮し、生涯柔道の一環として形の普及発展のために、形の全国大会開催を強く提唱し、講道館と協調して大会を開催することを決定した⁹⁾。そして平成9年(1997)9月には第1回目となる全日

本柔道形競技大会が、講道館と全日本柔道連盟の共催により開催され、本年度で19回目(20年間)を迎えた。また10回(10年間)の同大会を経た、平成19年(2007)には第1回講道館柔道形国際大会が開催された。国際的には平成17年(2005)から欧州柔道形選手権大会が欧州柔道連盟の主催により開催されており、平成20年(2008)には、前年に国際柔道連盟の新会長に就任したマリウス・ビゼール氏の新しいプロジェクトの一つとしも形の競技化が提案され、世界柔道形選手権大会のテストマッチとして国際柔道連盟形ワールドカップが開催され⁶⁾、翌年から正式に始まった世界柔道形選手権大会は本年度で8回目を数えた⁷⁾。また世界の動きに呼応するように、2010(平成23)年からはアジア大会も開催され、平成28年(2016)には東アジア大会も行われている。

それぞれの形競技大会は、国内においては講道館柔道の9種類の形のうち、「投の形」「固の形」「柔の形」「極の形」「講道館護身術」「五の形」「古式の形」の7つの形について講道館柔道形競技規定によって行われ、国際的には「投の形」「固の形」「柔の形」「極の形」「講道館護身術」の5つの形について、国際柔道連盟形競技規定により採点方式によって競技されている。

また全日本柔道連盟では平成21年(2009)6月に、形特別委員会が設置され、日本代表選手の選考、強化、競技に関する規定や審査員制度等の整備充実を図ることとなった。国際柔道連盟では、それに先駆けて平成20年(2008)1月に形委員会が発足している。

このように形競技は、柔道の普及、振興を図ることを目的として、国内で競技化されてから20年を経た。そして形競技は国際的にも広がりを見せており、その目的が達成されることが柔道界でも期待されている。

このような背景の中、柔道における形についての文献は多くあるものの、歴史的な経緯や技法に注目したものが殆どであり、形競技そのものについてはまだまだ知見の不足が否めない現状がある。実際に柔道形競技を実践している競技者にはどのような継続理由があり、その背後にはどのような要因があるのか。またそれは、柔道の創始者、嘉納治五郎が掲げた「精力善用」「自他共栄」の理念が反映されているものなのであるかなど、競技者の実態そのものも含め、明らかにされていないのが実情である。それらを把握しておくことは、今後の柔道の普及振興を考える上において必要なことであろうと考える。

II 先行研究の検討

柔道への取り組みについては、これまで数多くの研究者によって調査が行われている。

そこで前章の背景を踏まえ、柔道への取り組みに対する意識に注目した研究について検討を進めた。

1. 柔道の意識に関する研究

柔道に関する意識調査はこれまでに数多く行われている。尾形(1987)は、中学生による柔道のとらえ方を報告した。その報告によると、華やかさ、近代性の項目では否定回答が多く、「他のスポーツより苦しい、怪我が多い」ととらえている者が多い傾向にあったが、身体面への効果に関する項目については、特に筋力、柔軟性、持久力の項目において高い肯定回答の値を示した。また精神面への効果に関する項目についても、根気、強さ、礼儀正しさ、忍耐力の養成に対する項目で評定度が高い傾向にあったことを明らかにした²⁰⁾。

船越(1996)らは、高段者への意識調査の結果、柔道理念の真髄である融和共生への共感や妙技を渴望する心情は高段者ほど強く、心技修練に価値をおく思考は若年層に顕著であると報告している²¹⁾。

また、村山ら(2012)は、女子柔道競技者を対象とした意識調査の結果、競技と出産・育児の両立については肯定意識を持つ競技者が少ないことなどを明らかにしている¹⁷⁾。

2. 柔道競技者と他競技者との比較に関する研究

永木ら(1996)は、日本的スポーツ観について、柔道愛好者と一般スポーツ愛好者とを比

較し、柔道愛好者が一般愛好者に比べ、「修行的技術観」が高い傾向にあり、「伝統的形式主義」については低い傾向にあることから、礼法の軽視など現代的な変容を示唆しているのではないかと報告している¹⁹⁾。

また、藤原ら(2016)は、空手道、柔道、剣道及び集団競技実践者のスポーツ価値志向の比較を行い、「楽しみ志向」は集団競技実践者、空手道、剣道、柔道の順に高く、「自己鍛錬志向」は剣道実践者、柔道、空手道、集団競技、「勝利志向」は空手道実践者、柔道、集団競技、剣道の順にそれぞれ値が高いことを明らかにしている¹⁾。

3. 外国人柔道競技者と日本人柔道競技者との比較に関する研究

横山ら(2009)は、欧州柔道選手と日本人学生柔道選手の柔道に対する意識の比較を行い、欧州選手は柔道をスポーツ的に捉えていることが示唆され、日本人学生柔道選手は柔道を武道的に捉えていることが示唆されたとしている²⁴⁾。

また岡田(2013)らは、日本人柔道選手、韓国人柔道選手、アメリカ人柔道選手を対象に、柔道に対するイメージを調査研究した結果、日本人選手群には競技意識と怪我や外見を気にする身体的意識、更には伝統や文化を重んじる意識が現れ、韓国人選手群、アメリカ人選手群においては、自身の内面的向上と共に柔道技術の向上を意識し、柔道を通じて精神的な成長を強く意識されており、柔道は、伝統的な精神文化としての柔道と試合を主とした競技柔道が別々に普及・発展していると考えられると報告している²¹⁾。

4. 継続理由に関する研究

継続理由に関する研究は、橋本(1990)らの、大学柔道部員の練習継続意識についての研究、同じく橋本ら(1991)の、高校柔道部員の練習継続意識の研究がある。大学生部員は自己実現の方向に理由を見出す割合が高く³⁾、高校生部員は勝ち負けにこだわらない、柔道そのものへの愛着があることが伺えると報告された⁴⁾。

また射手矢ら(2011)は、柔道実践者の競技継続理由を明らかにするため、その他のスポーツ実践者を比較対象として、因子分析的研究を行った。その結果、両群の相違点として、柔道群には強くなる、身を守る、競争意識を高める、という「格闘技への魅力」因子と心の活性を求める「精神性の向上」因子があるのに対し、非柔道群は個人の目標を達成するという「自己実現」因子と爽快感が味わえるなど「快感情」の因子があるという違いを特徴として示した⁵⁾。

また、他競技にはなるが、山本(1990)は、正選手と補欠選手の大学運動部への参加動機を因子分析により調査した結果、「達成」「期待」「不利益回避」「健康体力」「社会的有用性」「自由平等性」「不安回避」因子が抽出され、これらの動機の中でも「達成」因子が最も重要であると報告した²⁵⁾。

5. 先行研究のまとめ

以上の先行研究を概観してきたが、柔道の意識に関する調査研究はさまざまな対象に行われていることがわかった。しかしながら柔道継続理由に関する研究は、現時点において多くは行われておらず、特に柔道形競技者の意識や継続理由についての研究は全く行われ

ていないことが明らかとなった。

III 研究目的

柔道が掲げる理念が、実際に継続理由として、柔道形競技者に反映されているか実証的に明らかにする。

IV 研究方法

1. 調査方法

質問項目は、射手矢ら(2011)の柔道の継続理由に関する先行研究や、山本(1990)の参加動機に関する研究を参考に 64 項目を選定した。質問項目の内容は、身体的、社会的、認知的、精神的、感情的な理由を含んだ運動継続に関わる項目であった。

選定された 64 項目の尺度を使用するにあたり、予備調査を行なった。柔道形競技において使用する上で問題ないかを確認するため、18 人の柔道形競技者に協力してもらい、64 項目の質問事項を回答の後、継続理由について、項目に含まれていないものがあるか自由記述による記入を依頼した。その結果、予備調査においては特に追加すべき継続理由は挙げられず、そのまま 64 項目が使用できるものと判断し、その後の研究を進めた。

64 項目の応答は 4 段階評定尺度（そう思わない/ややそう思わない/ややそう思う/そう思う）で行った。調査は、柔道形競技者に直接アンケートを配布し、回答後の郵送を依頼した。

2. 調査対象

柔道形競技を行う競技者を調査対象とした。平成 28 年度全日本柔道形競技大会、平成 28 年度 K 県柔道形選手権大会、平成 28 年度 T 地区柔道形競技会、平成 28 年度 K 地区柔道形競技会の出場者及び全日本柔道連盟形競技強化選手を対象とした。アンケートは、388 名に配布し、207 名（65%）の有効回答を回収した。

3. 調査期間

調査の時期は、調査対象となる大会参加者に、大会の場を利用して調査を行い、平成 28 年 7 月～10 月に質問紙を配布の上、回収を行なった。

4. 分析方法

各項目の応答により、そう思わない「1」は 1 点、ややそう思わない「2」は 2 点、ややそう思う「3」は 3 点、そう思う「4」は 4 点とし、各項目の平均得点、標準偏差を求めた。

射手矢ら(2011)及び山本(1990)の尺度を参考とした 64 項目を使用の上、柔道形競技の継続理由について調べるために、探索的因子分析を行うこととした。統計処理は IBM SPSS Statistics ver.24 を用いた。

V 結果

1. 柔道形競技者の諸元

調査対象者の諸元について、表 1 に示す。調査対象者の性別は、男性が 170 名、女性が 37 名であった。年齢の最大値は 77 歳、最低値は 12 歳であり、平均年齢は 45.09 歳であった。柔道の競技歴最長年数は 64 年、最短年数は 3 年であり、平均競技歴年数は 32.7 年であった。柔道形競技歴は最長年数 20 年、最短年数 1 年、平均年数 8.1 年。また、柔道段位については最高段位 8 段、最低段位無段、平均段位 5 段であった。

表 1 柔道形競技者の諸元

項目	n	%	項目	n	%
性別			柔道形競技歴		
男性	170	82	1～4年	71	35
女性	37	18	5～9年	58	28
年齢（平均45.09；標準偏差=14.04）			10～14年	38	19
10代	8	4	15～19年	21	10
20代	20	10	20年	16	8
30代	46	22	段位		
40代	51	24	無段	1	1
50代	45	22	初段	7	3
60代	31	15	二段	11	5
70代	6	3	三段	17	8
柔道歴			四段	25	12
1～9年	8	4	五段	49	24
10～19年	29	14	六段	61	30
20～29年	45	22	七段	31	15
30～39年	52	25	八段	5	2
40～49年	51	24			
50～59年	16	8			
60～69年	6	3			

2. 柔道形競技者の継続理由に関する質問項目と集計結果

柔道形競技者の質問項目と項目ごとの平均得点、標準偏差を表2に示した。64項目の中で最も高得点であったのものは、Q61「礼儀作法を重んじているから」の3.551点であった。最低得点はQ37の「お金になるから」1.140点であった。

表2 柔道形競技者の継続理由に関する質問項目と集計結果

質問	内容	平均	SD	質問	内容	平均	SD
Q1	基礎体力の向上・維持のため	2.899	0.895	Q33	あこがれている選手がいるから	2.126	1.001
Q2	基礎運動能力の促進のため	2.850	0.880	Q34	相手との接触があるから	2.107	0.865
Q3	健康の増進のため	2.841	0.974	Q35	ユニフォームが気に入っているから	1.623	0.765
Q4	自然に適応できるから	2.641	0.986	Q36	将来の目標があるから	3.077	0.948
Q5	身体の動きが美しくなるから	2.913	0.848	Q37	お金になるから	1.140	0.350
Q6	他のスポーツも上手になるから	2.014	0.840	Q38	人気があるから	1.401	0.528
Q7	体型を良くするため	2.106	0.910	Q39	評判がいいから	1.667	0.737
Q8	運動についての知識が得られるから	2.850	0.905	Q40	良いイメージがあるから	2.435	0.934
Q9	身体を鍛える方法を学べるから	2.546	0.978	Q41	近くに練習場があるから	2.348	1.061
Q10	ものごとを観察する能力が高まるから	3.077	0.904	Q42	競争意識を育成するから	2.367	0.972
Q11	想像力が高まるから	2.807	0.871	Q43	指導能力、組織能力を育成するから	3.150	0.895
Q12	積極的になるから	2.710	0.904	Q44	責任感を育てるから	2.855	0.834
Q13	判断力や決断力が高まるから	2.676	0.931	Q45	つきあい、助けあいの心を育てるから	2.942	0.766
Q14	忍耐力がつくから	2.957	0.817	Q46	自己抑制能力を高めるから	2.752	0.842
Q15	創造能力が高まるから	2.694	0.871	Q47	社会の発展のため	2.420	0.945
Q16	思いやりや友愛の気持ちを養うから	3.049	0.811	Q48	余暇生活を豊かにするから	2.469	1.010
Q17	正義感が強くなるから	2.329	0.928	Q49	全面的な人間の発展に貢献するから	2.709	0.907
Q18	情緒の安定に役立つから	2.725	0.879	Q50	運動種目のなかで大切なものの一つであるから	3.150	0.892
Q19	人を尊ぶ気持ちが養われるから	3.193	0.833	Q51	交友関係が広がるから	3.140	0.808
Q20	強くなりたいから	2.454	0.992	Q52	日常生活に生かすため	2.461	0.907
Q21	勝利を体験したいから	2.749	1.081	Q53	見ていて面白いから	2.589	0.917
Q22	他のスポーツは得意でないから	1.691	0.837	Q54	老若男女を問わずできるから	3.145	0.889
Q23	性格が良くなるから	2.087	0.931	Q55	人に教えたいから	2.903	0.993
Q24	公正な態度やマナーが育つから	3.179	0.848	Q56	充実した生活を送りたいから	2.797	0.940
Q25	勧める人がいるから	2.643	1.017	Q57	伝統的だから	3.141	0.937
Q26	励ましてくれる仲間がいるから	2.966	0.838	Q58	段位制度があるから	2.300	0.986
Q27	他のスポーツより簡単だから	1.357	0.601	Q59	自分の身を守るため	2.502	0.945
Q28	競技成績が良かったから	2.092	1.011	Q60	対人的だから	2.512	0.945
Q29	大きな怪我・病気がなかったから	2.213	1.071	Q61	礼儀作法を重んじているから	3.551	0.719
Q30	そう快だから	2.502	1.045	Q62	成功して有名になりたいから	1.981	0.929
Q31	近代的だから	1.816	0.631	Q63	新しい技術を覚えたいから	3.092	0.914
Q32	楽しいから	2.899	0.935	Q64	指導者としての資質を身につけたいから	3.377	0.944

3. 柔道形競技者の因子構造

柔道形競技者の継続理由に関する因子構造を調べるにあたり、探索的因子分析を行った。

まずは各項目の天井効果、フロア効果の確認からはじめた。各項目の平均値に対し、標準偏差を加えたものを最大値と比較し、最大値を超えたものについては、天井効果を示すものとして、「人を尊ぶ気持ちが養われるから」「公正な態度やマナーが育つから」「将来の目標があるから」「指導能力、組織能力を育成するから」「運動種目のなかで大切なものの一つであるから」「老若男女を問わずできるから」「伝統的だから」「礼儀作法を重んじているから」「新しい技術を覚えたいから」「指導者としての資質を身につけたいから」の10項目を除外した。

各項目の平均値に対し、標準偏差を減じたものを最小値と比較し、最小値を下回ったものについては、フロア効果を示すものとして、「他のスポーツは得意でないから」「他のスポーツより簡単だから」「ユニフォームが気に入っているから」「お金になるから」「人気があるから」「評判がいいから」の6項目を除外した。

まず、最初に因子数を特定せず、回転なしによる主成分分析による、探索的因子分析を行った。スクリープロットの作図を行い、累積寄与率を確認しながら、スクリープロットの固有値の傾斜の変化に着目した。スクリープロットの傾斜より、第4主成分までの累積寄与率と固有値から、4因子を仮定して再度探索的因子分析を進めた。

2回目の因子分析において、因子数を4に固定し、最尤法プロマックス回転による分析を行った。因子負荷量が0.35に満たない項目、「運動についての知識が得られるから」「段位制度があるから」「そう快だから」を削除した。また、因子負荷量が0.35以上の項目が

2 因子に跨る項目、「つきあい、助けあいの心を育てるから」「責任感を育てるから」「自己抑制能力を高めるから」についても除外し、再度因子分析を行った。

3 回目の因子分析において、再び因子数を 4 に固定し、最尤法プロマックス回転による分析を行った。因子負荷量が 0.35 に満たない項目、「楽しいから」「人に教えたいから」「良いイメージがあるから」を除外し、4 回目の因子分析において、因子数 4、最尤法プロマックス回転によって因子の構成項目を確定した。

因子分析により抽出された 4 因子（39 項目）の因子負荷と各因子の内的整合性の検討として算出されたクロンバックの α 係数を表 3 に示した。

表 3 柔道形競技者の因子構造

項目	因子 1	因子 2	因子 3	因子 4
因子1:精神性の向上($\alpha = .924$)				
忍耐力がつくから	0.891	-0.175	-0.045	0.035
判断力や決断力が高まるから	0.797	0.104	0.03	-0.139
積極的になるから	0.786	-0.116	0.155	0.1
創造能力が高まるから	0.765	0.129	-0.117	-0.095
想像力が高まるから	0.725	0.096	-0.141	-0.083
正義感が強くなるから	0.709	-0.019	0.108	0.016
思いやりや友愛の気持ちを養うから	0.699	0.03	-0.045	-0.052
ものごとを観察する能力が高まるから	0.638	0.224	-0.142	-0.113
情緒の安定に役立つから	0.558	0.125	0.102	0.024
身体の動きが美しくなるから	0.536	-0.102	0.269	0.119
他のスポーツも上手になるから	0.367	0.148	0.239	0.034
性格が良くなるから	0.363	0.204	0.059	0.217
因子2:社会性($\alpha = .879$)				
日常生活に生かすため	0.041	0.824	0.112	-0.309
自分の身を守るため	-0.029	0.612	0.171	-0.177
対人的だから	0.108	0.598	0.017	0.062
社会の発展のため	0.203	0.581	-0.125	-0.061
全面的な人間の発展に貢献するから	0.196	0.531	-0.005	0.06
見ていて面白いから	-0.029	0.511	-0.227	0.343
近代的だから	-0.113	0.509	0.08	0.247
余暇生活を豊かにするから	-0.088	0.505	0.174	0.074
相手との接触があるから	0.16	0.484	-0.03	0.142
充実した生活を送りたいから	0.032	0.457	0.073	0.161
交友関係が広がるから	0.148	0.418	-0.008	0.139
因子3:身体能力の向上($\alpha = .893$)				
基礎体力の向上・維持のため	-0.049	-0.008	0.971	0.007
基礎運動能力の促進のため	-0.032	0.042	0.93	-0.051
健康の増進のため	-0.119	0.029	0.902	0.01
体型を良くするため	0.138	0.004	0.518	0.133
自然に適応できるから	0.267	0.202	0.448	-0.173
身体を鍛える方法を学べるから	0.172	0.196	0.353	0.066
因子4:競技志向($\alpha = .800$)				
勝利を体験したいから	0.032	-0.153	0.059	0.615
励ましてくれる仲間がいるから	0.236	-0.243	0.07	0.598
成功して有名になりたいから	-0.281	0.158	0.049	0.594
勧める人がいるから	0.024	-0.15	-0.069	0.577
競技成績が良かったから	-0.295	0.047	0.038	0.561
競争意識を育成するから	0.163	0.161	-0.086	0.524
強くなりたいから	0.207	-0.031	0.035	0.483
大きな怪我・病気がなかったから	-0.083	0.1	0.145	0.451
あこがれている選手がいるから	-0.081	0.296	-0.017	0.409
近くに練習場があるから	0.122	0.163	-0.212	0.405

第1因子(12項目)は、「忍耐力がつくから」(0.891)、「判断力や決断力が高まるから」

(0.797)、「積極的になるから」(0.786)、「創造能力が高まるから」(0.765)、「想像力が高

まるから」(0.725)、「正義感が強くなるから」(0.709)、「思いやりや友愛の気持ちを養う

から」(0.699)、「ものごとを観察する能力が高まるから」(0.638)、「情緒の安定に役立つから」(0.558)、「身体の動きが美しくなるから」(0.536)、「他のスポーツも上手になるから」(0.367)、「性格が良くなるから」(0.363)などで負荷量が高く、精神性の方面からに自己の向上を目的とした因子であるので「精神性の向上」に関する因子とした。

第2因子(11項目)は、「日常生活に生かすため」(0.824)、「自分の身を守るため」(0.612)、「対人的だから」(0.598)、「社会の発展のため」(0.581)、「全面的な人間の発展に貢献するから」(0.531)、「見ていて面白いから」(0.511)、「近代的だから」(0.509)、「余暇生活を豊かにするから」(0.505)、「相手との接触があるから」(0.484)、「充実した生活を送りたいから」(0.457)、「交友関係が広がるから」(0.418)などで負荷量が高く、日常生活や社会に生活に活かす項目が表れていることから「社会性」に関する因子とした。

第3因子(6項目)は、「基礎体力の向上・維持のため」(0.971)、「基礎運動能力の促進のため」(0.93)、「健康の増進のため」(0.902)、「体型を良くするため」(0.518)、「自然に適応できるから」(0.448)、「身体を鍛える方法を学べるから」(0.353)などで負荷量が高く、主に身体能力に関する項目が表れていることから「身体能力の向上」に関する因子とした。

第4因子(10項目)は、「勝利を体験したいから」(0.615)、「励ましてくれる仲間がいるから」(0.598)、「成功して有名になりたいから」(0.594)、「勧める人がいるから」(0.577)、「競技成績が良かったから」(0.561)、「競争意識を育成するから」(0.524)、「強くなりたいから」(0.483)、「大きな怪我・病気がなかったから」(0.451)、「あこがれている選手がいるから」(0.409)、「近くに練習場があるから」などで負荷量が高く、主に競技に関する項目が表れていることから「競技志向」に関する因子とした。

VI 考察

1. 4 因子の考察

前章において柔道形競技者の継続理由に関する 4 因子が抽出された。本章においては、これらの 4 因子について考察を進めていく。

抽出された 4 因子は「精神性の向上」「社会性」「身体能力の向上」「競技志向」に分類された。柔道の創始者である嘉納治五郎は柔道について、「心身を鍛錬し、己を完成して世に役立たせる」と定義している。本研究の結果を概観すると、上記の定義にある「心身」が抽出因子の「精神」「身体」に相当し、「世に役立たせる」との考えが「社会」に相当しているものと考えた場合、柔道そのものの在り方について競技者が理解した上で取り組んでいることにより、その競技性についても「競技」として因子が抽出されたものと考えられる。

2. 各因子の考察

次にそれぞれ抽出された因子について詳細に検討を行っていく。

(1)「精神性の向上」因子

「精神性の向上」と命名した因子の項目は、「忍耐力がつくから」「判断力や決断力が高まるから」「積極的になるから」「創造能力が高まるから」「想像力が高まるから」「正義感強くなるから」「思いやりや友愛の気持ちを養うから」「ものごとを観察する能力が高まるから」「情緒の安定に役立つから」「身体の動きが美しくなるから」「他のスポー

ツも上手になるから」「性格が良くなるから」などで、主に精神面での成長や向上に着目した構成項目による因子となっている。因子負荷量の高い項目として、「忍耐力がつくから」や「思いやりや友愛の気持ちを養うから」などの項目が挙げられた。

改めて柔道形競技の競技方法を振り返ってみると、競技は技を掛ける「取」と、技を受ける「受」に分かれて2人で行うものであり、自らの技量を向上させるとともに、相手の技量も向上させ、互いの呼吸を合わせることが不可欠とされている。武道の競技において、空手道や中国拳法など形を競技化しているものは存在しているが、多くは一人で、架空の相手を想定しながら形を行うのに対し、柔道形競技は相手がいなければ成立しない点に特徴があると言える。相手がいることを最低条件としていることは、まさに柔道を象徴的に表している。通常の武道競技にない要素として、対人的な連携とお互いを尊重し合う具体的な取り組みがあることから、形競技の継続理由として競技の特徴が概念として抽出されたと考えられる。

(2)「社会性」因子

「社会性」因子の項目は「日常生活に生かすため」「自分の身を守るため」「対人的だから」「社会発展のため」「全面的な人間の発展に貢献するから」「見ていて面白いから」「近代的だから」「余暇生活を豊かにするから」「相手との接触があるから」「充実した生活を送りたいから」「交友関係が広がるから」などで、因子負荷量が高い項目として、「日常生活に生かすため」や「自分の身を守るため」の項目が挙げられた。

「精神性の向上」因子で挙げたことと同様に、柔道形競技において相手を思いやる気持ち、相手と呼吸を合わす思想は日常生活においても必要とされる能力とも言い換えることができる。

柔道においては、日常生活における必要な能力として、護身術としての意義を挙げている。「武術としての柔道の練習が、明治以降の新しい近代国家にあっても必要かつ有益である」と捉えていた嘉納治五郎の考えを踏まえた永木(2008)は、「如何なる時代にあっても不当な「暴力」が絶えない限り、己の身を守る「護身術」が必要である」とし、「より大衆(すなわち国民)の日常生活に適合した武術として、柔道にその価値をおくのである」と指摘している¹⁸⁾。また、形競技種目の一つである「講道館護身術」の概説には「社会生活を送る上で必要と思われる護身」と示されている¹⁶⁾。これらは、いつの時代にあっても生活の中での護身というものが、各個人の意識に存在しているとの考えから生じたものであろう。このように、柔道形競技者は護身と日常とは表裏一体の関係であると考えられており、社会に関わる項目として上記の2項目が「社会性」因子に含まれたものと考えられる。

また、先に挙げた「社会性」因子の項目を改めて概観してみると、「交友関係が広がるから」「対人的だから」といったような具合に、全体的に人間関係の改善につながる項目で成り立っていることがわかる。このことは、人間関係の形成と関連付けて考察することもできる。

柔道は本来、「精力善用」「自他共栄」の観点を持っており、その一つの視点として、交際のあり方が挙げられる。嘉納は、「自分もその交わりから得るところがなくてはなら

ぬが、友達にも得るところがあると考えさせるだけのことを、こちらからもしなければならぬ」¹⁵⁾と述べているように「精力善用」「自他共栄」の遂行において人間関係の形成は不可欠であり、柔道が本来有する意義として、柔道と社会性は密接な関係にあるといえる。

以上のことを纏めると、「社会性」因子の構造項目は、人間関係の改善に関わる内容で構成されている。そしてそのことが、柔道形競技者の継続理由として抽出された点に注目しておきたい。今回の調査を行なった形競技者達が、柔道の意義など上述の知識を有しているかどうかは明らかにできていないが、因子分析の結果として、柔道形競技において嘉納が述べていた真髓が先述のように現れたことは特筆すべきことといえる。

(3)「身体能力の向上」因子

「身体能力の向上」因子の項目は、「基礎体力の向上・維持のため」「基礎運動能力の促進のため」「健康の増進のため」「体型を良くするため」「自然に適応できるから」「身体を鍛える方法を学べるから」などである。

柔道の定義には、「攻撃防御の練習によって心身を鍛錬すること」とあるように、「身体を強健にし、これを実生活に適合するように鍛錬する」¹⁰⁾ことは、柔道の大きな目的の一つである。よって柔道修行者である形競技者も「基礎体力の向上・維持のため」、「基礎運動能力の促進のため」、「健康の増進のため」など基礎体力や基礎運動能力向上に関する項目を継続理由としていると考える。またそれらに付随する効果として、「体型を良くするため」「身体を鍛える方法を学べるから」なども継続理由として抽出されたと言える。

しかし、これらのうち、「自然に適応できるから」という項目については、他の項目よ

りも興味深い。言い換えると、これが形競技の継続として抽出された理由は、どのようなところに求められるのかについて考えてみたい。

柔道の形競技における自然環境への適応という点、寒稽古や暑中稽古が思い当たる。実際、講道館をはじめ柔道場等の多くでは、寒稽古と暑中稽古が行われており、積極的に参加する者も多い。嘉納は、「寒稽古は精神鍛錬、身体鍛錬の上に、最も適当なる好機会を与えるもの」¹¹⁾と意義づけ、「暑中稽古は一人前の人間として、通用する資格のあることを試みる場所である」¹²⁾と位置付けている。また佐々木ら(1993)は、自らの経験を元に寒中稽古と暑中稽古を行う理由として、「自然との調和」を見出し、修行を継続していくことで、怪我や病気の防止につながるのではないかということを述べている²²⁾。したがって、両稽古は主に気候状況に耐えるなか、自然環境に適応することができ、身体能力の向上に役立つとの解釈が可能である。

(4) 「競技志向」因子

「競技志向」因子の項目は、「勝利を体験したいから」「励ましてくれる仲間がいるから」「成功して有名になりたいから」「勧める人がいるから」「競技成績が良かったから」「競争意識を育成するから」「強くなりたいから」「大きな怪我・病気がなかったから」「あこがれている選手がいるから」「近くに練習場があるから」などである。

「勝利を体験したいから」という項目は、形競技を継続する上での目標となる。また、「励ましてくれる仲間がいるから」「成功して有名になりたいから」、「勧める人がいるから」「強くなりたいから」「あこがれている選手がいるから」といった理由は、競技大会に出

場する上でのモチベーションを維持させる理由として抽出されたと考える。従来、形は柔道修行の一環として行われたものであり、形競技は、柔道の普及発展を目的として、講道館・全日本柔道連盟が競技として確立した経緯がある。「競技志向」因子が抽出されたことは、形競技が競技性をもって行われている証左であり、従来の柔道修行の一環から独立した意味を持たせることに成功しているとも言えると考えられる。

(5)先行研究との比較

射手矢ら(2011)が示した、柔道実践者の継続理由から抽出された5つの構成概念と比較したところ、射手矢らの「人間形成」因子の構成項目は、本稿の探索的因子分析を進める上で、各項目が「精神性の向上」因子と「社会性」因子に分かれた。射手矢らの「格闘技への好奇心」に関しても同様に、「社会性」因子と「競技志向」因子に分かれ、射手矢ら「体力の向上」因子は、「身体能力の向上」因子に含まれた。また「精神性の向上」因子は、そのまま本稿の「精神性の向上」因子として構成された。射手矢らの「好感情」因子に関しては、「人気があるから」「評判がいいから」「お金になるから」といった項目によって構成されており、概ね全ての項目についてフロア効果を示したので、本稿では除外した。柔道形競技者の継続理由における競技の捉え方においては、「人気があるから」「評判がいいから」「お金になるから」といった考え方は、ほぼ持たれていない現状が明らかとなっている。

3. 考察のまとめ

以上、各因子の特徴を嘉納が示した柔道における理念と照らし合わせながら考察を行った。また、射手矢ら(2011)が示した競技継続理由に関する因子との比較からも、柔道形競技者の継続に関する理由の特徴が示された。

VII 結論

本研究を通じて、柔道形競技者の継続理由について、4つの構成概念を抽出し明らかにすることができた。これら抽出された「精神性の向上」「社会性」「身体能力の向上」「競技志向」の構成概念は、柔道創始者である嘉納治五郎の掲げた柔道の目的に合致するものであり、形競技を継続するうえで競技者の意識として根づいていることが明らかとなった。

VIII 研究の限界

本研究においては、柔道における現代的な課題として、柔道修行者の不祥事などを背景とした柔道における課題意識から、柔道の理念と競技継続理由に注目した。競技継続理由において、柔道の理念は息づいていることが明らかにされたものの、そうした理念が競技者の普段の行動に及ぼす影響までは明らかに出来なかった点において、本研究は極めて限定的に柔道形競技者の継続理由に注目した研究であると言える。今後、競技継続理由が本人の人格形成や行動に至る影響について調べることで、当初の諸問題に対して何らかの提言を行えるものとする点において、本研究は課題を残している。

IX 実践への提言

本研究において、柔道形競技者の競技継続理由についての検討を行ったことで、柔道形競技者が競技を継続するうえで、柔道の理念が意識として根づいていることが明らかとなり、柔道形競技による普及振興方法について当初の目的と合致した普及が行われていることが実証的に示された。

一方で、柔道形競技継続理由については、好感情が少ないことが明らかとなり、このことが柔道形競技の普及振興の妨げになっている可能性がある。今日柔道界では、一部の形競技大会において、「柔道ショー」と呼ばれるようなエンターテイメントによる普及啓発が行われている事例もある。継続理由における好感情の追求が今後の競技普及振興に重要である可能性を示すものである。

引用参考文献

- 1) 藤原弘生・池川茂樹・直原 幹：空手学習者価値志向に関する研究, 上越教育大学研究
紀要, 36-1, 2016.
- 2) 船越正康・藤猪省太・細川伸二・斎藤 仁・西田孝宏・小俣幸嗣・松井 勲・山本洋
祐・松本純一郎・河野和憲：柔道に関する意識の因子分析的研究～主要高段者の意識パ
ターンについて～, 柔道科学研究, 4, 15-26, 1996.
- 3) 橋本敏明・佐藤宣践・山下泰裕・中西英敏・白瀬英春・柏崎克彦：大学柔道部員の練
習継続意識に関する研究, 武道学研究, 23-2, 97-98, 1990.
- 4) 橋本敏明・佐藤宣践・山下泰裕・中西英敏・白瀬英春・柏崎克彦：高校柔道部員の練
習継続意識に関する研究, 武道学研究, 24-2, 117-118, 1991.
- 5) 射手矢味先・村田直樹・高橋 進・コランチェリー：柔道実践者の継続理由に関する
研究, 武道学研究, 44-1, 13-23, 2011.
- 6) 小俣幸嗣：IJF 形ワールドカップ 2008, 大学体育研究, 31, 2009.
- 7) 小俣幸嗣：第 1 回世界柔道形選手権大会, 大学体育研究, 32, 2010.
- 8) 講道館：柔道, 第 2 号, 大正 4 年 2 月号, p26-27.
- 9) 講道館：柔道, 平成 9 年 11 月号, p4.
- 10) 講道館：嘉納治五郎体系 1 巻, 本の友社, p155, 1988.
- 11) 講道館：嘉納治五郎体系 2 巻, 本の友社, p269, 1988.
- 12) 講道館：嘉納治五郎体系 2 巻, 本の友社, p272, 1988.
- 13) 講道館：嘉納治五郎体系 3 巻, 本の友社, p105, 1988.

- 14) 講道館：嘉納治五郎体系 3 卷, 本の友社, p106, 1988.
- 15) 講道館：嘉納治五郎体系 3 卷, 本の友社, p358, 1988.
- 16) 講道館：講道館護身術, p1, 2004.
- 17) 村山晴夫・中村 勇・山口 香・田辺陽子・岡田弘隆・南條充寿・林 弘典：女子柔道競技者を対象とした意識調査, 武道学研究, 34, 31, 2012.
- 18) 永木耕介：嘉納柔道思想の継承と変容, 風間書房, p57, p65, 2008.
- 19) 永木耕介・薮根敏和・山崎俊輔：柔道愛好者の日本的スポーツ観に関する研究
～一般的スポーツ愛好者を比較の対象として～, 武道学研究 29-2, 36-46, 1996.
- 20) 尾形敬史：柔道に対する意識の研究（第一報）～中学生を対象として～、武道学研究, 11-2, 1978.
- 21) 岡田龍司・徳安秀正・岡崎祐史・松田基子・森脇保彦・中島たけし：柔道に対するイメージ調査の研究～日本人及び外国人柔道選手群を対象として～, 近畿大学教養・外国語教育センター紀要（一般教養編）, 3-1, 61-72, 2013.
- 22) 佐々木武人・柏崎克彦・藤堂良明・村田直樹：現代柔道論, 大修館書店, p234-246, 1993.
- 23) 田中 守・藤堂良明・東 憲一・村田直樹：武道を知る, 不昧堂出版, p56, 2000.
- 24) 横山喬之・石川美久・竹澤稔裕・仲田直樹・篠原信一：欧州柔道選手と日本人学生柔道選手の柔道に関する意識の研究, 柔道科学研究, 14, 14-18, 2009.
- 25) 山本教人：大学運動部への参加動機に関する正選手と補欠選手の比較, 体育学研究, 35, 100-119, 1990.

添付資料

柔道形競技者の形競技に対する継続理由についてのアンケート					
I 柔道形競技の継続理由について、各項目の当てはまる番号に必ず○をつけてください。					
(1. そう思わない ・ 2. ややそう思わない ・ 3. ややそう思う ・ 4. そう思う)					
1	基礎体力の向上・維持のため	1	2	3	4
2	基礎運動能力の促進のため	1	2	3	4
3	健康の増進のため	1	2	3	4
4	自然に適応できるから	1	2	3	4
5	身体の動きが美しくなるから	1	2	3	4
6	他のスポーツも上手になるから	1	2	3	4
7	体型を良くするため	1	2	3	4
8	運動についての知識が得られるから	1	2	3	4
9	身体を鍛える方法を学べるから	1	2	3	4
10	ものごとを観察する能力が高まるから	1	2	3	4
11	想像力が高まるから	1	2	3	4
12	積極的になるから	1	2	3	4
13	判断力や決断力が高まるから	1	2	3	4
14	忍耐力がつくから	1	2	3	4
15	創造能力が高まるから	1	2	3	4
16	思いやりや友愛の気持ちを養うから	1	2	3	4
17	正義感が強くなるから	1	2	3	4
18	情緒の安定に役立つから	1	2	3	4
19	人を尊ぶ気持ちが養われるから	1	2	3	4
20	強くなりたいから	1	2	3	4
21	勝利を体験したいから	1	2	3	4
22	他のスポーツは得意でないから	1	2	3	4
23	性格が良くなるから	1	2	3	4
24	公正な態度やマナーが育つから	1	2	3	4
25	勤める人がいるから	1	2	3	4
26	励ましてくれる仲間がいるから	1	2	3	4
27	他のスポーツより簡単だから	1	2	3	4
28	競技成績が良かったから	1	2	3	4

(1. そう思わない ・ 2. ややそう思わない ・ 3. ややそう思う ・ 4. そう思う)					
29	大きな怪我・病気がなかったから	1	2	3	4
30	そう快だから	1	2	3	4
31	近代的だから	1	2	3	4
32	楽しいから	1	2	3	4
33	あこがれている選手がいるから	1	2	3	4
34	相手との接触があるから	1	2	3	4
35	ユニフォームが気に入っているから	1	2	3	4
36	将来の目標があるから	1	2	3	4
37	お金になるから	1	2	3	4
38	人気があるから	1	2	3	4
39	評判がいいから	1	2	3	4
40	良いイメージがあるから	1	2	3	4
41	近くに練習場があるから	1	2	3	4
42	競争意識を育成するから	1	2	3	4
43	指導能力、組織能力を育成するから	1	2	3	4
44	責任感を育てるから	1	2	3	4
45	つきあい、助けあいの心を育てるから	1	2	3	4
46	自己抑制能力を高めるから	1	2	3	4
47	社会の発展のため	1	2	3	4
48	余暇生活を豊かにするから	1	2	3	4
49	全面的な人間の発展に貢献するから	1	2	3	4
50	運動種目のなかで大切なものの一つであるから	1	2	3	4
51	交友関係が広がるから	1	2	3	4
52	日常生活に生かすため	1	2	3	4
53	見ていて面白いから	1	2	3	4
54	老若男女を問わずできるから	1	2	3	4
55	人に教えたいから	1	2	3	4
56	充実した生活を送りたいから	1	2	3	4
57	伝統的だから	1	2	3	4
58	段位制度があるから	1	2	3	4
59	自分の身を守るため	1	2	3	4

(1. そう思わない ・ 2. ややそう思わない ・ 3. ややそう思う ・ 4. そう思う)

60	対人的だから	1	2	3	4
61	礼儀作法を重んじているから	1	2	3	4
62	成功して有名になりたいから	1	2	3	4
63	新しい技術を覚えたいから	1	2	3	4
64	指導者としての資質を身につけたいから	1	2	3	4

II あなた自身について質問にお答えください。

なお、2)におきましては当てはまるものに○をつけてください。

1) 年齢()歳

2) 性別(男 ・ 女)

3) 柔道歴()年

4) 柔道形競技歴()年

5) 段位()段

III 形競技に関するご意見があればお聞かせください。

以上でアンケートを終了いたします。

ご協力ありがとうございました。